人間社会デザインコース，戦争の政治学
担当教員：福田　喜彦

「戦争の政治学」におけるＦＤ活動への取り組み

社会科教育講座・福田　喜彦

１．本授業の目的とその概要

本授業では，戦後 60 年が過ぎた今日，「アジア・太平洋戦争」と呼ばれている歴史像を検証することでその争点を明らかにし，21 世紀におけるわが国の歴史認識のあり方を多様な視座から模索することを目的としている。1945 年８月に敗戦を迎えた戦争は，「大東亜戦争」や「太平洋戦争」，「１５年戦争」といった様々な名称を冠しながら歴史学的な研究が進められてきた。そこでは，戦争の名称自体が歴史的な評価を含み，歴史観や戦争観への争点を形成してきた。特に，本授業では，到達目標として，以下の２点を設定した。①1945 年の敗戦を機に日本の政治がどのように変貌したのか，その間の政治過程を概観し，説明することができる。②戦争に関する記憶をめぐる，さまざまな政治的対抗関係を分析し，記憶と体験について考察を深める。こうした目標を達成するために，本授業は以下のような形で授業を進めた。前半部では，1945 年を機に日本の政治の変容に焦点をあわせて，長期にわたる政治過程を概観した。あわせて，総力戦体制下の政治と軍事との関係を検討した。そして，後半部では，現在の戦争に関する記憶をめぐる政治的対抗関係を明らかにし，記憶と体験，個人的記憶と集合的記憶などの問題をとりあげた。戦場の記憶や被爆者の記憶も題材にしながら，歴史叙述の可能性も言及した。

２．小レポート課題の設定とテーマへの理解度

本授業では，様々な課題を設定してテーマへの理解度を図りながら授業を行った。例えば，「日本近代史における戦争と植民地」「満州事変以後－国際政治なかの帝国日本－」「世界のなかのアジア・太平洋戦争」「総力戦体制－政治と軍事－」「地域のなかの軍隊」「戦場の諸相」「民衆の戦争体験と戦後」「被爆者と在外被爆者」「帝国の忘却と記憶－「記憶の政治学」－」「記憶装置としての博物館」「記憶とメデイアー映画論」といったテーマを設定した。また，授業時間外に行う課題として３回の小レポートを課して理解を深めた。まずはじめに，①近代社会と軍隊の形成について，軍事官僚機構が自立する過程，独自の軍事思想や組織原理の確立，軍隊教育のあり方などを資料を参考にしながら，自分の考えを述べなさい，②植民地の獲得と近代日本の関係について，台湾や韓国の領有が日本の近代社会にどのような変化を生みしたのかを資料を参考しながら，自分の考えを述べなさいの２点である。次に，加藤陽子『それでも，日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社，2009 年）を読んで，演習で議論し，以下の点に関して考察してもらった。例えば，①日清戦争に関して，「列強にとって何が最も大切だったのか」「民権論者は世界をどう見ていたのか」「日清戦争はなぜ起きたのか」などを資料をもとにまとめなさい，②日露戦争に関して，「なにが新しい戦争だったのか」「戦わなければならなかった理由とは何か」「日露戦争がもたらしたものは何か」などを資料をもとにまとめなさい，③満州事変と日中戦争に関して，「当時の人々の意識はどのようなものであったのか」「満州事変はなぜ起こされたのか」「事件を起こした主体は誰か」などを資料をもとにまとめなさい，などである。さらに，映画『ラストエンペラー』（東北新社，1987 年）を視聴して，以下の点に関しても考察してもらった。①清朝最後の皇帝である愛新覚羅溥儀が満州国の皇帝となっていく過程がどのように描かれているか，②満州国での日本人や日本の関東軍の将校たちの様子はどのように描かれているか，③満州国が崩壊していく過程はどのように描かれているかなどである。このような課題を検討しながら，最終のレポート課題では，講義の内容をふまえ，①近代日本と軍隊，②帝国日本と満州，③戦争の記憶と歴史表象の３つの課題を設定した。学生はその中から選択して，戦争を政治学的な観点から考察して，各自がレポートを作成した。

３．本授業に対する学生の意見と改善への視座

本授業を受講した学生からは次のような意見

が出された。以下，いくつか事例をあげてみたい。

「授業全体を通して，一つの事案に対しても，様々なものの捉え方があることに改めて気付かされました。日本人が日本の歴史で学ぶ歴史と，中国の人たちが学ぶ歴史，朝鮮半島の人たちが学ぶ歴史はそれぞれ異なっていることや，これまで疑いもしなかった過去の歴史が，資料などを丹念に読み解くことで，新たな側面が見えてくることがあることなどから，絶対的に正しいものなどなかなかないことを感じました。また，シンドラーのリストを見た際にも，シンドラーを神様のように思っている人と，根本的には金儲けが目的だったのだと冷めた目で見ている人がいましたが，その証言はどれもが後世に事実を伝えるための貴重なものだと思いました。様々な捉え方や考え方があり，それらはどれも尊重すべきものであると思いますが，一方で，存在する真実をまるでなかったかのように扱うことはあってはならないと思いました。今回のレポートで扱った南京事件もそうですが，一部の人たちは南京事件そのものがなかったかのような立場をとっています。なぜそう考えるのかも理解したいと思いますが，負の歴史であっても，同じ過ちを繰り返さないように，積極的に学び語り継ぐべきだと感じます」（４回生，Ａさん）（下線部は筆者。以下同様。）

「今回戦争の政治学を受講して，一番印象に残ったのは，戦争に対する新たな考え方だと思う。特に私たち留学生にとって，日本の大学では，昔母国を侵略した日本に対する考え方が変わったと思う。若い年代の私たちは歴史を忘れたみたいで，歴史に対するイメージも薄いと思う。この授業を受け，忘れた歴史を思い出すことができ，歴史から様々な教訓を得ることができたと思う。現在，日本の大学に通っている私たち留学生は，日本の教育を受けることができ，日本の文化も学ぶことができた。これは，中日両国の友好の結果であり，将来の中日関係をよりよくするための重要な一歩であると思う。歴史は忘れたらいけないが，歴史からさまざまなことや教訓などを学ぶことが大事だということが今でも中日両国の国民に伝えたいと思う」（４回生，留学生Ｂさん）

「戦争の政治学は，歴史の苦手な私にとっては難しいものであった。一つの戦争を取り上げても，中身は複雑で，その前後の歴史についても理解しておく必要があったからだ。また，立場や国の違いにより，その戦争の見方が違うことを学んだ。「ラストエンペラー」を鑑賞して，日本はこういうふうに外からみられているのかと実感した。歴史を考える上で，完全に客観視することは不可能に近い，私が日本国民であると自覚しているなら，そこに日本人である主観が生まれる。しかし，自国だけで客観視することは無理でも外からの目線を借りると，それに近づくことができる。他国に視野を広げてみることが，歴史上の事実をただ暗記させる歴史教育から，これからを考えるための歴史教育になるのではないだろうかと気づくことができた」（２回生，Ｃさん）

「戦争の政治学を受講して，戦争の記憶ということについてよく考えてみることができました。ホロコーストについてももっと考えたいなと思いましたし，今まで日本の戦争にしか興味がなかったですが，もっと戦争について視野を広げて，他の戦争と日本の戦争の共通点などを考察していきたいと思います。戦争ということを，戦争を経験していない世代の私が学習するということはある種の危険性をも持っているおかないと，一つの価値判断（たとえば日本は加害体験を認めるべきだという感じで）で戦争を見てしまいかねないなと感じましたし，今までそうだったなと感じています。これは平和フォーラムでも活かせることなのでしっかり頭に入れておきたいと思います。取り上げてほしいテーマとしては，現代の戦争の政治学を取り上げてほしいです。現代の戦争，紛争がなぜ起こってしまうのか，日本はどの立場にいるのかを明らかにしたいです。そのうえで，私は過去の戦争から何を学ばなければいけないのか，何を伝えていく必要があるのかを考えたいです。あと，国際的な戦争を継承する政治的な動き，個人的な動き，さらに戦争の記憶に対して，歴史教育ができること，なども扱ってほしいです。だんだん平和フォーラムになっていきますが，平和フォーラム以外の人の考えを聞ける機会なので戦争の政治的な側面について幅広く扱ってほしいです。教育と現代の戦争を結びつけ過去からの経験を分析し，未来の平和な社会の形成につながっていくように個人的にも研究していきたいと思います。「それでも，日本人は「戦争」を選んだ」の内容を議論できたのはおもしろかったと思いますし，もっと議論できればよかったなと思います」（２回生，Ｄさん）

４．本授業の総括と次年度へ向けた課題

本授業を受講した学生の意見をみてみると，設定した課題に対して，多様な側面から考察を加えて，「戦争」を捉える視点を見出していた。学生から出された改善点も踏まえ，授業を通してさらなる知見を提供できるように配慮していきたい。